

新発田歩兵第百十六聯隊奮戦記

【第11回】長沙作戦（岳南作戦）

新発田駐屯地援護室 佐藤 和敏

昭和十六年八月、事変も既に四周年を迎え南京新政府の業も漸く堵につき、英・米・ソの援蔣既に其の力なく、今や重慶政権は氣息奄々として衰退の一途を辿りつつあった。

此の秋きに当たり軍は、之に一大鉄槌を加え以って事変解決の一要素とする為、長沙作戦を決行する事となった。

時しも宜昌作戦以来警備既に一年余、師団長の指示に基づき、夏秋の頃に戦力を最高度に発揮する如く聯隊は、訓練に訓練を重ね、益々戦力を培養し早淵支隊（歩百十六聯隊・歩五十八聯隊第一大隊・山砲十九聯隊一大隊欠）となり、師団を代表して長沙作戦に参加する事となった。

敵は勇将薛岳麾下の第九戦区と、相手にとって不足はあれど、鍛えに鍛えし健腕を振るうは今、越佐健児の真價を天下に知らせるは今と、部隊長以下一同意氣衝天にあった。

「集結」

八月十八日二三三〇、聯隊(第一大隊欠)は、軍旗を奉じて支隊の第二梯団となり紫金嶺を出発、鴉鵲嶺～新店を経て二十一日當陽に到着。二十二日より昼間行軍を以って、一意支隊集結地の孝感に向け行軍を続行、二十四日漢水渡河、宜昌作戦の苦心を偲びつつ、途中酷暑を冒し降雨を衝き、堂々四百余キロの行程を踏破。九月一日、目的地孝感に到着、該地に於いて疲労の回復、兵器被服の整備を行うと共に、隊長会同を催して更に聯隊長の意図を徹底せしめ、鋭意作戦の諸準備を整えた。

九月四日、新鋭の第五十五期見習士官を迎えて志氣愈々昂揚、八日汽車輸送にて揚子に移動、十一日揚子より乗船、十二日〇六〇〇朝霧を衝いて出港、長江の濁流を切って岳州に向い遡航。十三日一四三〇岳州上陸、秋色深き岳揚樓外、一葉二葉散る木の葉も抗日蔣政権の末路を物語るが如し。

斯くして聯隊は十四日、軍の計画に基づき、松樹嶺～梅子溪附近に集結を完了、十六日には第四回の軍旗祭を迎え「軍旗奉拝式」を挙行、宮城を遥拝した。

「第一期作戦」(鹿角附近の戦闘)

支隊は第四師団の進出に伴い、鹿角方面に転進して新墻河下流左岸の敵を捕捉撃滅すべき命を受け、聯隊主力は左縦隊前衛となり、第二大隊を中縦隊、第三大隊を右縦隊として、九月十七日夜、新墻河右岸に於いて突進を準備、二三〇〇新墻河を渡河。十八日黎明後第四師団の攻撃進捗に伴い、新墻東南地区より新墻左岸高地の線を突破楔入、残敵を駆逐しつつ前進、藤岡隊(一個中隊・聯隊砲一門)を右側衛として孫武に向い突進させ、主力は一七三〇随受九に進出し、二〇〇〇孫武に到着、藤岡隊を掌握し夜を徹した。

敵第九十師は、本十八日未明、逸早々南方に退避し附近一帯大なる敵影を認めなかった。

十九日支隊命令に基づき、藤岡隊を〇七三〇鹿角に先遣させ、聯隊主力は〇八〇〇孫武出發、第二中隊を右側衛として鹿角に向い掃蕩を開始した。

先遣隊は一〇四〇鹿角を占領し、江上の海軍と連絡を取った。主力は一三四〇鹿角に進出、支隊主力の到着を待ち陸戦隊に同地の警備を移譲し、二十日〇八〇〇集結地に向い出發、黄沙街～火田を経て、二十一日托平瀧に進出し第二・第三大隊を掌握して汨水南岸に対する攻撃を準備した。

(神鼎山附近より撈刀河畔に亘る戦闘)

九月二十一日、軍命令により支隊は第四師団長の隷下に入る。

聯隊(第三大隊欠)は、支隊命令により二十二日〇九三〇托平坪出發、羅水・汨水を渡河、三合厝附近に向い前進、一一一〇新市附近に陣地を占領していた敵約三百を撃破し、敵陣を突破南進、二〇〇〇元宵瑕附近に進出、二十三日小敵を駆逐しつつ一一五〇関山北方高地に進出した。

約一個団の敵は、天嶮密岩山東西の線を占領し、我が進撃を阻止した。聯隊は第一大隊を右第一線、第二大隊を左第一線として一二〇〇攻撃開始、山砲及び重火器の協力の下、猛攻に次ぐ猛攻を以って遂に一八一〇第六中隊は突撃を以って密岩山を完全に占領、第一大隊又密岩山西方脚の敵を撃破し、敗退する敵を追躡して南方第二線陣地に近迫。

二十四日黎明と共に攻撃を再興、払暁に当面の敵を撃破して突進、正午、新規目標たる馬山神に進出、第四師団主力正面の敵、第九十五師の背後深く進出し背面より攻撃。師団主力の攻撃と相俟って、第九十二師・第九十五師を潰滅し再転、馬山神附近に夜を徹し南進を準備した。

此の間第一大隊は、下手倉南側に抛る敵を撃壊、之を追尾して劉家洞高地を経て一七一五斬兒橋附近に進出し、支隊の前進を容易にした。更に同夜張家嘴に進出し、栗橋東西の線に抛る敵陣地に対し攻撃を準備した。

同日軍の長沙追撃の企図を承知し、志気益々揚がった。

二十五日、聯隊主力は茅根堤東西の線に向い出発、一〇二〇馬家嶺東側高地に於いて敵の抵抗を受けるや、直に之を攻撃、第二大隊を以って一三〇〇毛家坊西方台地に進出した。

敵は頑強に抵抗して、特に茅根堤東側台地よりする側防火熾烈を極めたが、山砲・平射砲等の銃眼射撃に依る援護の下に一八〇〇遂に敵陣を突破、夜に入るも追撃を続行した。

第一大隊は、馬家嶺北側高地山麓より小敵を撃破しつつ、一挙一四三〇茅根堤水流の線に進出、更に第二大隊と連繫し一九二〇毛塘南方二キロの地点に進出した。

二十六日、支隊は爾後主力を以って敵を急迫捕捉せんと企図した。

聯隊は支隊命令により、青山案・小厝を経て突進又突進、途中第九中隊を撈刀河口鉄道橋に突進させ、第三大隊と連繫して同地の敵を捕捉した。

主力は残敵群れる中を直路南進、一七〇〇頃撈刀河畔に進出、敵は我が疾風の如き進撃と、得意の浸透戦法により全く戦意喪失し既に浮動の態勢に在り、聯隊は撈刀河を敵前渡河し一挙に長沙に進撃すべく着々準備を実施した。

第一大隊は呉家瑕北方高地に抛る敵約五〇〇を撃破した後急進し、渡河直前の聯隊主力に追及した。

二〇〇〇民船により第二大隊を第一線として敵弾雨注の中を渡河、神助と将兵の奮闘に依り無血渡河に成功。第二大隊は直に夜襲を以って左岸敵陣地を突破、聯隊長又軍旗を奉じ、敗敵に追尾して敵陣を突進、下白茅舖に進出、第一大隊右第一線として一四一高地～洪山厝高地の敵を〇九〇〇攻撃開始、遂次敵陣地を攻略、一三二〇重火器の援護射撃と飛行機の密接な協力の下、遂に洪山厝の敵陣地を奪取し河岸に進出した。

第二大隊は潰走する敵密集部隊に対し、折からの霧を利用して追撃を続行、西側高地及び対岸よりの敵火を冒し此の敵の大部を殲滅して、瀏陽河北岸に進出、渡河準備に努めた。撈刀河・瀏陽河間の敵は、退路を封ぜられ必死の抵抗を試みるも我が壮烈なる立体戦の下に殲滅的打撃を受けた。

九月二十七日、早朝来瀏陽河右岸に進出した聯隊は、待望の長沙を目前に控え鋭意渡河材料の収集に努め、河幅約百五十メートル、水深約五メートル、対岸には尚残敵抵抗を試み、舟を利用しなければ渡河攻撃は困難、工兵隊・山砲の密接なる協力の下、民船により再び無血渡河に成功。残敵を掃蕩しつつ長沙に向い突進、第一線部隊は一六二五、更に聯隊は一七〇〇軍旗を奉じ他兵団に先んじて遂に敵の牙城、長沙の東北角に突入、之を確保

した。感激の此の日、一番乗りの栄光再び聯隊の上に輝いた。

二十八日、早朝来長沙並びに周辺を掃蕩、重要軍事拠点を占領すると共に、敵の逆襲に備え警戒を厳にした。

二十九日、長沙旧体育場に於いて感激も新たに、軍旗奉拝式挙行、宮城を遥拝して万歳を奉唱した。第四師団の進出に伴い、更に掃蕩警備を継続し、三十日早朝、敵の逆襲あるも直に之を攻撃潰走させた。

「第二期作戦」(反転作戦)

九月三十日、聯隊は第四師団主力の反転に先立ち行動を開始し、橋頭駅附近に進出して師団の反転を援護すべき命令を受け、重要軍事施設を破壊し軍需品の焼却を行いたる後、第三大隊を長沙北方地区警備のため残置して、一九三〇夜と共に反転行動開始、第一大隊を前衛として瀏陽河・撈刀河を渡河した。

十月一日未明、北岸地区に進出、引続き橋頭駅に向い西進、一一三〇前衛が牛頭咀附近に達した時、突如前面高地に陣地を占領していた敵と衝突した。直ちに第二大隊を前衛の右に進出させ、遂次戦闘を統一して此の敵を攻撃、敵は既設陣地に抛り頑強に抵抗を試み、「チェッコ」(チェコ製の軽機関銃)の十字火及び迫撃砲の集中射撃を以って我が前進を阻止し、第一大隊長川崎少佐は遂に敵狙撃弾のために壮烈なる戦死を遂げた。

聯隊は重点を右に保持し、敵を右側より席捲する如く猛攻を続行、第二大隊は遂に敵陣地たる太陽山を奪取進出したが終夜に亘り敵火熾烈を極めた。此の敵は第九十八師で、我が爆撃により一時湘江左岸に退避したが、我が長沙進入と共に其の後方に潜入を企図し、再び渡河して来たもので、附近の既設陣地を占拠し抵抗した。此の敵を湘江に圧迫、殲滅すべく態勢を整理し明日の攻撃を準備した。

十月二日、重点を青蓮寺方向に保持して敵を捕捉撃滅することに決し、長沙に残置した第三大隊を掌握し鋭意攻撃準備中、第二大隊長は敵「チェッコ」の狙撃により頭部に貫通銃創を受け遂に壮烈なる戦死を遂げた。

昨日来二人の大隊長を失い、連隊は益々復讐の念に燃え一五三〇第三大隊右、第二大隊を中、第一大隊を左第一線として勇躍攻撃開始、敵の堅陣を突破して、先ず西方に突進し湘江河畔に進出、敵の北方逸出を遮断すると共に更に南面橋羊山を経て撈刀河河口に敵を圧迫、算を乱して河岸に殺到する敵に猛射を浴びせ、同師主力約五千を徹底的に殲滅、今次長沙作戦最後の成果を収めた。

十月三日、師団の外翼部隊たる支隊の前衛となり更に北進、道林橋～黄金原を経て戴公橋南方稜線に進出、此の間敵の抵抗なし。

十月四日、依然北進、大番周に進出す。

(江北地区への転進並に宜昌東辺の戦闘)

宜昌周辺の戦況に鑑み、聯隊主力は第二大隊・山砲一大隊を以って、急遽營田を経て江北に転用されることとなり、五日〇九一五大番周出発、花石橋を経て營田に急行、強烈なる直射日光の下、風無く相当難行軍であったが二〇三〇營田に到着、直に乗船作業開始。

六日〇五〇〇搭載を完了、大小船舶六十艘に分乗し一〇〇〇揚子に向い出発、途中岳州沖に於いて阿南軍司令官に見送られ感激を新たにし新堤通過。

七日一五〇〇揚子到着、輸送に関する諸準備に努める。

八日、昨夜来必死の努力にも拘らず、車両不足。輸送力の関係により聯隊本部の一部、第一大隊本部の一部、第二大隊主力、山砲一門を以って急遽先行するに決し、〇七〇〇沙洋鎮二向い前進（自余は汽車輸送により孝感迄、同地よりは自動車又は徒歩にて追及）

長江埠、応城を経て蕩進、途中敵少数の射撃を受けるも介意することなく。

九日〇四〇〇沙洋鎮着、〇七〇〇漢水渡河、軍命により第三十九師団長の指揮下に入る。

沙洋鎮十里舗道路は処々破壊されており、徒步行軍を以って北上、十日一九三〇車橋舗に着く。途中掇刀石附近に於いて第一大隊主力が自動車にて追及、更に當陽に向い先行。

〇三三〇自動車にて車橋舗出発、此の日寒冷厳しく、あまつさえ豪雨肌を洗い、道路は泥濘と化し難行軍を続け、一三〇〇當陽到着、飛行機にて先行した支隊長の指揮下に入った。

先着した第一大隊は既に敵を撃破しつつ前進中で、聯隊主力は一七〇〇當陽出発、敵の為徹底的に破壊或いは阻絶された難路を克服し、新店を経て二四〇〇王家店到着。大休止後十二日〇二〇〇輜重兵第十三聯隊の自動車に依り、鴉鵲嶺に向う途中敵の射撃を冒して第一次輸送部隊は〇三三〇、第二次輸送部隊は〇九三〇夫々鴉鵲嶺到着、糧秣・弾薬を補給した。

第一大隊は一三〇〇、主力は一七〇〇自動車にて土門壩を経て求雨台に突進、敵は十数個師の兵力を集中して、宜昌奪還を呼号せしも我が陣地守備隊の果敢なる反撃と、航空機の徹底的爆撃とにより多大の損害を蒙り、特に後方補給の欠除を遺憾なく暴露し、加えるにわが救援部隊の進出に伴い、遂に其の企図を放棄するの止むなきに至った。

十一日、敵は夜より倉皇として南方及び北方に退避を開始しつつあり。

聯隊は反転開始以来、昼夜兼行強行軍を続けたにも拘らず将兵の志気極めて旺盛。敵の退却を知るや直ちに宜昌よりの追撃部隊と連繫協力して、此の敵を臨江溪河口の捕捉撃滅すべく第一大隊を右第一線、第二大隊を左第一線として雷家冲を臨江溪河口に向い攻撃前進、敵の退路遮断に努めたるも既に敵主力は逸早く遁走し、僅かに残敵を駆逐したのみで痛恨極まりなし。十二日夜半雷家冲附近に兵力を集結した。

十三日、宜昌よりの追撃隊と連絡成り、北方に退却せる敵を追撃すべく、第三十九師団主力の土門壩進出に伴い北上、一三〇〇金巴嶺東西の線に進出した。敵は全面的に退却せし如く其の片影を見ず、同夜半、李家祠南方に進出し北地区守備部隊と連絡す。

十四日、原所属に復帰を命ぜられ、一二〇〇土門壩に集結。軍旗奉拝式を挙げて感激も深く一八四〇高家店到着、第一大隊を原警備地に復帰せしめた。

主力は十五日〇八〇〇高家店出発、一三〇〇上溪窑に於いて第二大隊を原態勢に復帰せしめ、一七〇〇軍旗を奉じて紫金嶺に帰着、夫々原態勢に復帰した。

十七日、第三大隊紫金嶺に迫及、董市区の警備に復す。

十九日、菅井中尉の指揮する補充員到着、夫々所属に分配す。

十一月七日、四戸少尉の指揮する駄馬部隊帰来、聯隊は完全に原態勢に復帰した。

越えて十一月八日、隊長官舎北側広場に、地を清めて壇を設け、第六回聯隊合同慰霊祭を厳粛に挙げてした。安置されたる英霊は、北方作戦及び長沙作戦並びに此の間に於いて陣没せられたる勇士、九十二柱。この日一文字台上は青空無限にして秋気深く、金風飄々としてそぞろに人の心を傷ましむ。

(参考文献「聯隊歴史 歩兵第百十六聯隊」より)